

理学療法 50 年のあゆみと展望—新たなる可能性への挑戦—

名古屋大学大学院医学系研究科 内山 靖

50 年の間に科学技術は著しく進歩し、疾病構造の変化、生活習慣の変容、少子高齢化、国際化、情報化など、社会の変化とともに理学療法のニーズは拡大と変遷を遂げてきた。国民の期待は、健康寿命の延伸を共通の目標として、生活の場に応じた連続した理学療法を、明確な根拠をもって安全かつ効果的に実施することが挙げられる。そのためには、“予防”と“参加”を理学療法の文脈で推進することが求められる。

近年では、運動器、神経、呼吸循環代謝など、診療科に対応した高度な病態の理解に基づく専門医との連携が不可欠である。ただし、理学療法は、人間を総体としてとらえ、参加や活動に資する基本的動作能力の回復を中核とする専門職である。基本的動作は、運動の発現に関係する筋一骨・関節、制御に関係する神経、運動の維持に必要な酸素供給と栄養、動くことへの意欲や情動などを切り離して考えることはできない。動作の観察、さまざまな検査を統合した治療指向的な解釈、主な課題一目標一治療プログラムの相互

関係を結びつけるなど、症候障害学的な臨床推論(クリニカルリーズニング)能力は理学療法士にとってのコア・コンピテンスとなる。

理学療法の学問体系は、分子生物学から倫理を包含した生命科学から、公衆衛生学、工学、教育学や福祉・医療経済学を含めた街づくりに関するポピュレーションアプローチまでを含む学際的な要素で形成される。また、学術活動には、臨床での気づきを科学的な手段で視覚・標準化し、さらなる臨床の可能性と質を向上する感性や個性を認証する使命がある。

保健に関わる専門職は、臨床、研究、教育、管理運営・政策、国際・地域貢献の5つを適切に配分し統合する必要がある。これには、大学・大学院での高度な教育研究や卒業後研修制度など、良質な機会を提供する組織・制度的な取り組みも求められる。

本大会を、これまで先達が脈々と紡いでこられた実績と思いを振り返り、新たなる可能性へ挑戦していく機会としたい。

心身の立て直しと“人生の物語”

ノンフィクション作家・評論家 柳田 邦男

「人は物語を生きている」一病気や障害を背負った人々の話に耳を傾けたり、闘病記や回想記を読んだりすることの多い作家生活をしている中で、私が抱くようになった人間観を簡潔に言い表すと、そうなる。

人が中年期なり老年期になって人生を振り返り、辛かったこと、悲しかったこと、楽しかったことなど、強く印象に残ったエピソードを思い起こし、それらのエピソードを1つごとにエッセイか回想記として文章をまとめていくと、どんな人でも20章とか30章に及ぶ人生一代記が立ち上がってくる。まさに人は物語を生きているのだということが実感される。

人生をそのような形で振り返ると、それまで自分の人生はつまらないものだった、無意味だったと思いこんでいた人が、「よくぞ自分はあの辛かった時期を乗り越えたなあ」「自分の人生は捨てたものじゃあないな」といった自己肯定感を持てるようになる。ナチ

スドイツのユダヤ人大量虐殺から生き延びた精神医学者V. フランクルが語った言葉一「生きることそれ自体に意味があるだけでなく、苦悩することにも意味、しかも絶対の意味があります」という言葉に私は全幅の共感を覚えるのだ。

そして、もう1つ、私が大切にしている人間観は、「心身一如」というとらえ方だ。心と身体は1体のものであって切り離せないということ。西洋近代科学は両者を切断してとらえるが、現実の人間はそんなものではない。例えば、あるALS患者は足腰の衰弱を少しでも防ぐために、懸命にリハビリを続けて心を屹立させていた。ある末期がんの美容師は床に伏しても手指のリハビリを続けて、ハサミを使って店に立てる日への希望を捨てなかった。これらの行為は「心身一如」の思想とどうかわかり、どんな意味があるのか。また、「物語を生きる」という文脈にどのように位置づけるのか。そんなことを語ろうと思う。